

性の学問的研究も全く大屋博士に始まる。東大寺では平岡定海氏を中心に宗性上人研究会が作られ、博士の遺稿を増補して、謄写版の「宗性上人関係資料集(年譜)」を逐次刊行中であつたが、新たに文部省の出版助成金の交付を受けて今回の出版を見たのである。平岡氏は現在東大寺図書館主事として東大寺史の研究に秀れた業績をもつ人であり、氏の努力によつて本書が出版されたことは、慶びにたえない。

宗性は鎌倉時代における南都東大寺の華厳学の指導者として注目すべき僧である。島地大等氏は日本仏教教学史の中で、宗性の教学の特色として、華厳学、殊に賢首と清凉の華厳学に関するものが多いこと、俱舍論明思抄を著したこと、僧伝研究を始めて行つたこと、法華経上宮王義疏抄を著して三経義疏研究に始めて着手したこと、春華秋月抄草を著し、また俱舍・唯識・成実・十地論等の教学比較を行つたことなどを列挙されたが、宗性のこれらの業績は、その弟子凝然にうけつがれて見事な大成を見たのであつた。凝然を南都教学の大成者と見做すならば、当然宗性はその基礎を築いた碩学として重視されねばな

らないことは多言を要しない。「宗性権僧正は近代の名哲也、智弁縱横、弥天の徳を把し、難清雅、経国の量を播す、華嚴・因明・俱舍・法相皆悉く研究し、精詳ならざる無く、諸宗の奥旨兼ね暢べて遺す無し」という凝然の

宗性評は、弟子の師に対する礼讃ばかりでなく、宗性の偉大さをよく示していると言つてよい。宗性は凝然の師として看過し得ないと共に、深く貞慶・明恵に私淑し、熱烈な弥勒信仰に生きたという点でも鎌倉仏教史上特に注目される。彼が多数の自筆著書を遺し、その点では充分な研究素材がありながら従来殆んど研究がなされなかつたのは、その正確な年譜が知られていなかつた為でもあつた。その意味からも本書の刊行を契機として、宗性研究の深化が期待される。

本書は宗性の年譜で、大日本史料の体裁に准じ、綱文を立て、関係史料が掲げられてある。年譜であるから、もし宗性の教学の具体的検討を志すならば、直接原典に当らねばならないが、その為には史料に東大寺図書館の架番号を附する配慮がはらわれている。上巻は嘉禎三年宗性三六歳までが収められ、中心をなすものは、叢勝講問答記・法勝寺御八

講問答記・維摩会問答記などの問答日記である。

春華秋月抄・弥勒如来感応抄などの大部のは奥書をのみ示してある。

宗性の著書には裏文書を有するものが多く、本書にも宗性が父藤原隆兼から相伝した遠江国榛原郡質侶庄関係の文書が収められている。その他のものは、直接宗性と関係がないので省略されているが、堀池春峰氏の編纂に係る東大寺遺文第八巻には建保三年から承久元年十月までの宗性自筆本の裏文書が収載されているから参照されるとよい。下巻の速かなる出版を祈つて紹介の筆を擱く。(A5 判五四四頁 日本学術振興会発行 定価一、六〇〇円) (石田善人)

京都大学国史研究室編  
日本近代史辞典

このたび、京都大学国史研究室関係の近代史研究者の手により、「日本近代史辞典」が編集・刊行された。

幕末嘉永・安政期から現代(第二次岸内閣)までの、政治・経済・社会・文化の全般にわ

たり、徹底した小項目主義によつて、およそ三三〇〇項目を収めている。執筆者は京大だけでなく、全国的に近代史研究者を結集しており、各項目はいずれも年代と事実を明確にし、陰陽暦の対称関係などに厳密にされている（たとえば外交関係項目をみよ）。日本近代史の研究が近時とみに盛んになりながら、その学問としての歴史の若さから、なお多くの点において見解の相違を存在せしめている現状のもとで、このような事実それ自体の確定を主要な目的とした辞典の刊行は、まさに機をえたものである。項目ごとに参考文献を掲げ、執筆者名を記して責任の所在を明らかにしていることも、右の見地からみて適切な処置であると思われる。

さらに、この辞典の大きな特徴として、全体の三分の一の頁数を占める付録・統計・索引をあげねばなるまい。付録には、府藩県对照表・初期官制沿革表をはじめ、明治初期主要官職補任・元老・歴代内閣・植民地長官・主要対外外交官・同駐日外交官・特殊銀行・会社最高幹部・陸海軍主要官職補任・占領軍行政機構および主要ポスト補任等々全部で三七の一覧表がある。明治主要新聞雑誌・左翼

運動機関紙誌一覧・右翼団体系統図などは珍しいものである。統計は、人口・農・林・漁・鉱・工業・運輸・貿易・通貨および金融・会社・物価・労働・財政・教育・衛生の各項について基礎的なデータをあげている。最後に、本文・付録を通じて出てくる約一五〇〇〇の件名・書名・人名の索引を作つているので、本文の記載と合せて一種の索引年表的な役割をも果している。総じてこれらの点は、近代史における読史備要のような機能を果すものとして個人的な使用に甚だ便利であり、編集者の苦心の察せられるところである。ただ、これだけのものとしては、索引の見出し（五十音順）がみにくいのが残念である。（A5判九九〇頁 東洋経済新報社発行 定価二、三〇〇円）（朝尾直弘）

### 京都大学西洋史研究室編 西洋史辞典

京都大学西洋史研究室関係者約百三〇名が五年の歳月を重ねて刊行したものである。本来この辞典が計画されたのは、「読む」辞典をたてまえた大型の辞典とは別に、利用

度の高い小項目主義の「引く辞典」の果す役割が、案外なおざりにされていたのではなからうかという反省から出発したのであつた。五千からなる各項目は、単に歴史事実の羅列ではなしに、歴史評価、アップ・ドゥ・デートの見解や問題におよんでいて、歴史研究家以外の使用にも充分配慮が加えられているようである。項目の選定にはとくに苦心のあとがうかがえる。

また九人のすぐれた編輯委員の緊密な協同作業が、この種の辞典におこりがちな各項目の間に生じやすい不統一を最少限にいとめているのは見事である。また各項目に付せられた原名の出し方についても苦心のあとがうかがわれ、印刷も「引く辞典」として満足出来るものであろう。

また付録として、人名・地名対称表、首長表、系図、科学史年表、行政区劃圖、地図などがつくられている。（各時代、各地方の貨幣の種類とその換算表が缺けているのは惜まれる。）とくに総索引には非常な配慮がはらわれており、本書の利用価値を倍加しているといつても過言ではない。（A5版約一〇〇〇頁 東京創元社発行 二、三〇〇円）（永井三明）